

住民参加の公園づくりについて  
—ワークショップによるプロセスプランニングの事例として—

下関市立大学 正会員 ○坂本紘二  
九州大学 正会員 外井哲志  
k. k. 緑景 非会員 武林晃司

1. はじめに

まちづくりや公園整備等において、住民参加による計画づくりにワークショップ（以下、WS）が昨今盛んに実施されるようになった。著者らは先に、福岡県内における住民参加による施設づくりの進捗状況を調べると同時に、WSを重ねながら計画策定と再整備が進められている福岡市南区の長丘中公園を事例として、多様な主体間の意見が共有され合意形成が促され、参加意欲が醸成される点で、WSは有用な手法であることを報告した<sup>1)</sup>。他に一般的に、多様な意見や情報を収集できること、参加者の気づき、理解、知識が増進し対象への意識が変容すること、あるいは、管理や活用等に対する協働意識が増進しパートナーシップの輪が形成されること等がWSの効果として指摘されている<sup>2)</sup>。また、公共事業を進める際の住民参加の計画づくりにおいて、住民だけではなく行政や専門家の意識変容に向かう上での有効な手法として、WSが求められてもいる<sup>3)</sup>。

長丘中公園では、基本構想の策定から、基本設計・実施設計案づくり、基盤整備の工事施行まで、その都度、住民参加のWSを重ね、詳細な施設整備については、実際に利用しながら住民たちの意向に沿って進めていくプロセスプランニングの手法が採られるに至った。このような整備の進め方がWSの合意の下に決定されたことは、行政を含めた参加者の意識変容が遂げられた結果であり、WSによる成果の一つであると考えられる。本研究は、長丘中公園におけるWSの経過を追究し、WSによる計画手法の意義を明らかにしようとするものである。

2. WS開催の発端と公園の概要

長丘中公園（10,700㎡、1968年開園）に隣接する市菜池（5,200㎡）は、以前農業用溜池として使われ、都市化進展後は洪水調整池（調整容量15,500㎡）の役割を果たしている（図一1）。この池を含む公園の再整備計画の中で、約10年前に「運動場兼治水池」の整

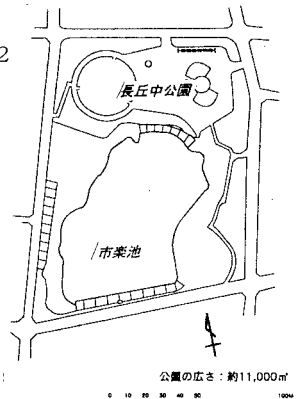
備案が作成されたが、自然保護の団体からの反対に遭って白紙に戻され、長年の懸案になっていた。「市民主体のまちづくりの実現」をめざして1996年度に始まった福岡市の地域づくり推進事業の中で、南区地域づくり協議会が1997年度の事業の一つとして取り組み、合意形成を図りながらこの公園再整備に生かしていこうと、地域住民参加による池と一体となった公園の構想案づくりのWSが開催された。

3. WSの経過

表一に示すように、これまで4ラウンドのWSが行われている。WS1では「池を生かした自然志向型の公園」案がまとめられた（図一2）。案の策定後連絡ミスから、保存が決められていた森の木が一部伐採される事件が起こったが、住民達は不測の事態でも前向きに捉える姿勢に変わっていた。WS2では「みんなが楽しめる、自然に親しめる公園にしよう」と基本設計案が定まった（図一3）。トイレの設置は住民の間で賛否真二つに分かれたが、自然観察用展望所と込みにする施設の住民提案で合意が得られた。WS4で意見の分かれた広場のフェンスについては、形を変えデザインの施した設置案でまとまった。このようなプロセスの中で、行政も住民と一体となった案策定の作業に段々と積極的に取り組むようになっていった。

4. 公園整備の進め方

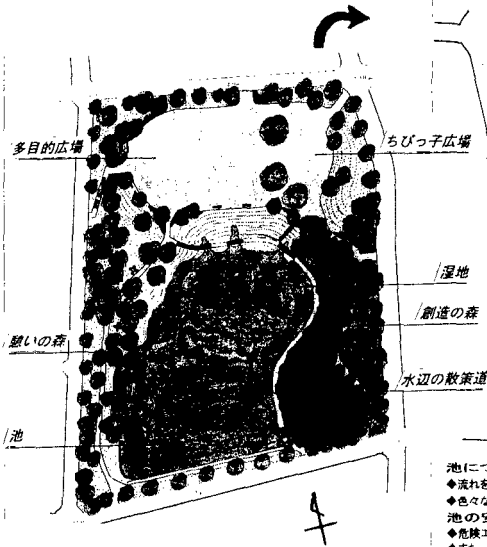
基本設計策定のWS2の段階で、遊具などの施設については、実際に使ってみて様子を見ながら必要とされるものを徐々に整えていくやり方が提案されていた。実施設計を定めるWS4の過程で、今回の工事の進め方は、2〜3年で終わらせてしま



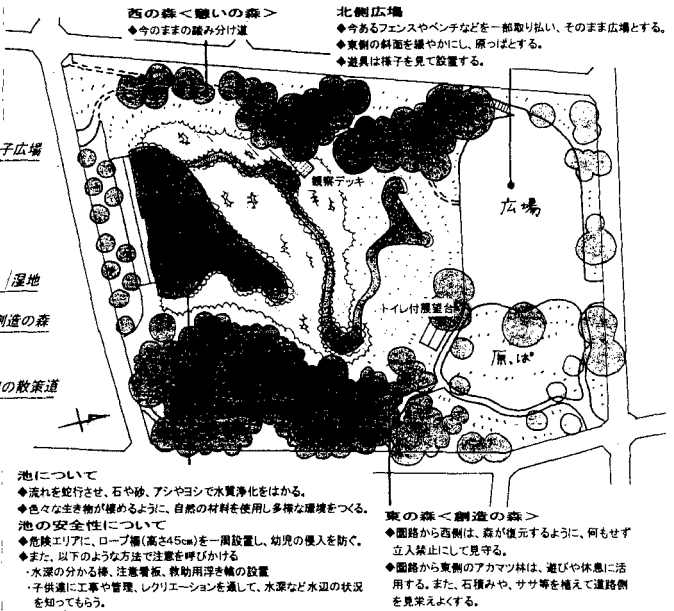
図一1 工事前の市菜池と公園

表一 長丘中公園ワークショップの経緯

ワークショップと目標	開催時期	WSの回数	主な内容
1. 基本構想のプランづくり	1997.10 ～ 1998.1	4回 + シンポ ジウムで発表	参加者にとって望ましい公園プランを植生や生物等専門家のアドバイザーも受けながらまとめ、市に提案した
2. 基本設計をまとめる	1999.4 ～ 1999.8	4回 + 工事 説明会	構想案をもとに本格的整備に向け、池・森・散策路の形や公園の姿など、考え方・方法にも踏み込んだ大略設計内容の確定
3. 池の工事チェックと参加	1999.11 ～ 2000.1	2回	最初に進められる池の部分の工事における設計図面をチェックし、工事参加で生き物の移植作業を行った
4. 施設等実施設計案づくり	2000.7 ～ 2000.9	3回 + 工事 内容発表会	入り口スロープ、広場のフェンス、園路、観察デッキ付トイレ、斜面の広場など公園改修案をまとめた



図一 望ましい公園プラン (平面イメージ図)



図一 長丘中公園基本設計

表二 工事の進め方

基盤整備 (最低限必要なもの)	1期(2000年)	工事参加イベント・観察会
	2期(2001年)	工事参加イベント・観察会
施設整備 (必要な施設の追加)	3期(2002年)	ワークショップと設計
	4期(2003年)	ワークショップと設計
	5期(……)	継続

う通常の工事ではなく、まず2年で最低限必要なものまで工事し、実際に使ってみながらWS等を重ね、さらに必要な施設を5期まで追加工事していくことが決定され、プロセスプランニングの手法が採られることになった(表一2)。

### 5. おわりに

今後も必要に応じてWSが継続されながら公園整備が進み、行政と住民による管理体制も確立していくものと思われる。プロセスを含んだの整備の進捗は、公園としての機能を十分に発揮して、親密感の濃い利用度の高い公共の場を形成するに違いない。筆者は、水利に関するモタセシステムの技術論にお

いて、時間経過の中で変動を体験する度に修復を経て段々と整い、自然のリズムを獲得して安定し、歳月とともに親しみや豊かさが増していくような施設のありようを「成っていく構造」と称している<sup>4)</sup>。長丘中公園再整備の進め方は、そのような持続性を求める計画手法と技術の展開であると考えられる。課題は、公園の維持管理や運用面にかかわるようになる住民意識の生成にどのように結びつくかである。今後の推移をなお見守ってきたい。

### 参考文献

- 1) 奥儀・坂本・辰巳・古川・浜田「住民参加型公園づくりにおけるワークショップの有用性」土木学会西部支部研究発表会(2000.3) pp. 764-765
- 2) 宮本・道上・喜多・楢谷「河川整備計画の策定における住民参加に関する一提案」土木計画学研究・講演集No.23(1)(2000.11) pp. 39
- 3) 村田・延藤「参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察—ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定(柳井市)を事例として—」2000年度第35回日本都市計画学会学術論文集 pp. 841-846
- 4) 坂本・外井「筑後川中流域における水利の技術システムの変遷に関する研究」土木史研究 No.14 (1994.6) pp. 77-92